

---

# 駄菓子の中に異質は微笑む

麻栗留音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

駄菓子の中に異質は微笑む

### 【Nコード】

N8122Y

### 【作者名】

麻栗留音

### 【あらすじ】

駄菓子のような駄菓子の話。でも駄菓子だから、何処かで見た様で、何がおかしい。それもまた駄菓子。

人生で一番勉強した高校受験、そして受かった三流県立高校の、掃いて捨てるくらいどこにでも居る男子高校生。それが僕。

僕は例外無くあくびをしながらダルそうに登校し、好きな授業はちゃんと受け、嫌いな授業は睡眠時間とし、2時間目の休み時間は友達とくつつちゃべり、昼休みはベランダでワイワイ飯を食う。

掃除は案外ちゃんとやり、下校間際に部活に向かう友達と廊下や昇降口で談笑し、NORTH FACEのリュックを背負って下校する。

僕は掃いて捨てるくらいどこにでも居る男子高校生。しかし僕には夢がある。僕は、世界一の品揃えを誇る駄菓子屋を、この田舎の商店街に創るんだ。

僕は帰宅部である。

世間一般的に帰宅部には根暗で陰険な、やりたい事の無い者が選択する、学生時代に青春を謳歌したくない者が辿り着く偏見が、部落差別という土農工商の亡霊と共に存在する。しかし学校に内緒でバイトをしなければいけない事情に在る学生には、幾らか寛容な眼差しが向けられ、僕もその眼差しの中で「今日バイトだよー」とかダルそうに吐いたりして、幸いにも自分の居場所はある。

僕は平日の月曜、木曜と週末に、地元の団子屋でバイトをしている。此処の団子屋は時給800円で昼飯は団子屋が発注してる蕎麦・うどんおかわり自由+日替わりおかず付き、しかも朝は1杯350円取っている水出し珈琲が無料で飲めて、仕事も大した事無い。友達の紹介で始めたバイトだが、実に割りの良いバイトだと思っている。僕にはまだ納税義務が無い。バイト代は全て手取りになる。僕は月のバイト代を半分は将来、駄菓子屋を開業するための元手、半分は地元の駄菓子屋に還元する事になっている。地元で得た金は地元に戻

す、地産地消は共同体維持の大切な基本であり、大量消費時代で忘れがちなユニティーだと思っている。だから僕はコンビニやチェーン店で買い食いはしない。

僕は例外無く下校時に買い食いをするが、このシャッター街と化した閉塞感漂う地元を、商店街の一角にある古参の駄菓子屋「はらだ」で買い食いをする事で、非力ながら地方経済活性化に貢献しているつもりだ。

僕が小学校低学年の時から此処にある「はらだ」。

僕が初めて下校中に買い食いをしたのは、忘れもしない小学3年生の時だった。僕は「ならぬ事は、ならぬものです」という白虎隊の教えを忠実に守る、絵に書いた「しっかりした子」だった。その日僕は先月に転校して来た、クラスの全員を泣かせた「いじめっ子」と一緒に下校していた。

僕は集団での差別とかイジメとか、小学校に入学する以前の幼い頃から虫酸が走った。

「なんでみんな仲良く出来ないのか、仲良くすれば良いのに」と思っていた。世代を越えて、コミュニティを創り異端者を共通の敵とする事で、自らの共同体を維持する行為が在る。クソだなんて、ずっと思っていた。孤独に耐えられない者が群れ、自身の存在意義を馴れ合う共同体など吐き気がしたし、不気味だった。だから僕は、俗に言う「はぶられた者たち」とも別け隔て無く遊んだ。だってその方が楽しい。だから小学3年生にしては大きな体付きをし、ギラギラとしているが何処と無く孤独感の在る目付きをしたこの「いじめっ子」とも、一緒に仲良く下校する。

その日も全く思い出せないけれど、実に色々な話をしながらこの「いじめっ子」と下校した。そして拾った。100円玉を。

僕は白虎隊の更に少年隊。「交番へ届けよう」と主張する。しかし「いじめっ子」は「はらだでうまい棒を10個買って、5本ずつ分けよう」と言った。自ずと意見はぶつかり合い、結局白虎隊だけだと押しは弱かった僕は根負けし、その想定外に得た金銭を「はらだ」

で消化し、うまい棒を10個買って5本ずつ分けて食べた。今思えば、これが正に不良への入り口であり、僕の人生のターニングポイントとして宿命が用意した必然だったのだろう。

僕は駄菓子の美味しさに魅力された。それまでもお小遣いを貰って駄菓子を買っていた。駄菓子を買ったのは、この時が初めてでは無い。しかし、この拾った100円玉で友達と分け合って買った「うまい棒」の味は、魔性を秘めた禁断の果実という表現でしか表せない程、美味しかった。ただ、「美味しかった」、無性に。そして果てしなく。

「拾ったお金を交番へ届けずに、それで友達とお菓子を買って食べている」、この罪悪感から得体の知れないスリルが生じ、幼心に「悪い事をしている」という背伸びした感情は、うまい棒の多々ある魅力的なフレーヴァーのどれよりも刺激的で、僕はこの時に食べたうまい棒に心を奪われた。

メフィストに魂を売って一切れのパンを得た、極貧相の市民。人を殺めてまでに、重労働従事者が飲みたかった1杯のビール。そして拾った100円玉で友達と分け合った10本のうまい棒。

全てに魔性が宿っている。僕は「いじめっ子」と貪り食ったうまい棒に魂を魅力され、将来絶対に他の追隨を許さない、自分も買って食べたい駄菓子を圧倒的に網羅した駄菓子屋を創ると、悪魔の契約書に消しゴム判子を押しした。

だから部活というコミュニティに属さず、僕は契約を全うする為に、資金をバイトで稼いでいる。買い食いも「はらだ」でしかない。優れた経営者として存在し、新しい価値を創造するには孤独に耐える勇気が必要だ。顔を拡げる為のコミュニティ、パーティー、全てに置いて本当の人脈など生まれない。果ての無い孤独に耐え、想像を絶する苦難を乗り越える中で用意された必然とぶつかり合い、鍛練され、研磨されて出来上がった絆だけが本物だ。それは得ようとして得られるもので無く、追い掛けて掴めるものでも無い。自分が自分の目的と目標に向かい、直向きに進撃に、頑なに果てしなく邁

進する事で初めて、運命が用意してくれる奇跡だ。

まだ人生なんて微塵も考える事も無かった、真っ白なキャンパスの上で自由に生きていた、あの日の僕には「いじめっ子」が用意された。そして僕は用意された「いじめっ子」によって、駄菓子子の権化となった。稲妻の走る暗い空の下、古びた洋館で交わした契約書。その皺がれた紙面に押された消しゴム判子から夢が生まれて、夢は目的と目標に変わり僕を邁進させる。僕はごく普通の男子高校生。普通の高校へ通い、普通のバイトをし、普通に友達と談笑している。

普通の中には異質が隠れていて、普通とはそれを包むオブラートの様なものだ。「きびだんご」を包むオブラートの様なものだ。本当の異質は、オブラートにすっかり包まれて時が来るまで決して姿を現さない。完全なる異質は、未熟のままに正体を光に曝したりしない。ある日突然に、そして強烈に現れて、それまでの世界を一瞬にして変える。あの日拾った100円玉のように人の人生を変えるような衝撃を、しかし静かに携えて商店街の一角に悪魔のように微笑みながら、ただ其処に在る。そんな駄菓子屋にしたい。

「なんだこの駄菓子子は！」「こんなものまであるのか！」、そうやってあらゆる世代の人を楽しませ、その中にあるあの日の僕のような存在が1人でも生まれる、そんな駄菓子屋を創りたい。異常な普通の中に在り、完全なる異質。僕の人生感を決定付けた駄菓子、その本質を具現する店を僕は創り上げる。必ず。

今日も僕は野心をオブラートに包み、下校からの「はらだ」という夢の途中の寄り道を楽しむ。今日は金曜日でバイトも無いし、地域経済活性化に貢献する日なのだ。

つか、小難しい事無しに、駄菓子が食べたくて食べたくてしょうがねえんだ。能書きだよ、今までの文章なんて、「駄菓子が大好き」だから「世界一の駄菓子屋やりたい」、それで片付けられんだ、実は。真実はいつもシンプルであり、シンプルの中には洗練があつて、僕の人生感なんて詰まる所「駄菓子」なんだ。

シンプルな様で胸焼けする程クドく、余計なもんばつかでもなんか楽しくて、バリバリ着色されてガンガン添加されて、体に大打撃でもある日無性に欲しくなる。だから駄菓子はやめられないし、僕の人生もやめられないんだ。楽しくて。

「NO DAGASHI NO LIFE」、そんなステッカー創って携帯に貼ろうかな、そんな事も若干思いながら「はらだ」の前まで歩いて来た。

今日は200円で「ビッグカツ」と「梅ジャム」+「サラダ煎餅」、  
「どん太郎」を3袋に「すもも」、金が余ったら「5円チョコ」でも適当に買おつ。今日はおばちゃんオマケしてくれっかな、10年くらいずっと通っててもたまにオマケしてくんない日があっからななどの算段を立てて、いつもの木製のスライド式の扉をガラガラと開けた。

「お待ちしております、タカシ様。」

通い慣れた其処には、見慣れた白い割烹着を来た、ホッペの下にホクロがあつて笑うと金歯がチラチラ覗く、いつもの優しいおばちゃんは居なかった。

金髪で白いタキシードを着た丸いサングラスを掛けた、僕の名前を知っている若い男が、あの日から変わらず、ずっとカビ臭い「はらだ」の店内に軽く微笑みながら立っていた。僕は頭の中が真っ白になった。シンプルに、訳がわかんなかった。

「タカシ様。誠に末永く、この特務機関・皇立文化肅正隠密同心…、いや…、はらだをご利用頂き有り難うございます。本日晴れて、タカシ様のはらだポイントが100万ポイントを越えました。このポイントはタカシ様を皇立文化肅正隠密同心の志士として認定する事で還元させていただきます。では、こちらへ。」

割烹着ではなく、上質な白いタキシードを来た金髪の男が、ジョン・レノンがしてるような丸いサングラス越しに目を細めたのが解った。相変わらず微笑んでいるが、僕にはそれが良い意味でのものなのか、何かとてつもない悪意からのものなのか、はつきりしなかった。駄菓子味のようにはつきりしなかった。

ただ、「いじめっ子」と分け合って食べた「うまい棒」のような、得体の知れない衝撃が身体中を包み込んでいたのだけは、はつきりとわかった。

普通から、異質が遂に姿を現した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8122y/>

---

駄菓子の中に異質は微笑む

2011年11月24日00時49分発行